

# 個人山行報告

## ヨーロッパアルプス回顧録

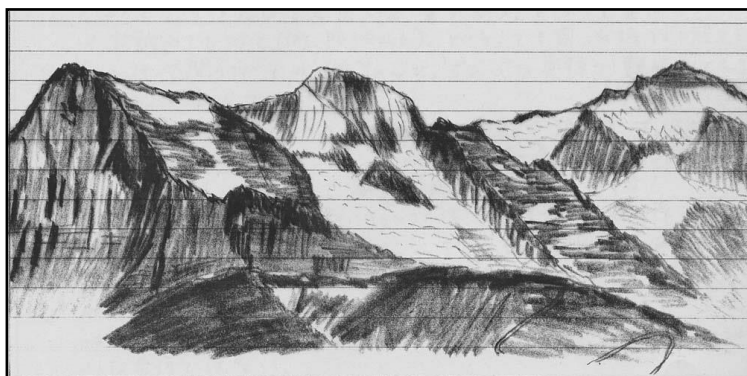
藤井 諭

1975年に単独でのヨーロッパアルプス登山の記録である。第1回のシャモニー滞在、第2回はツェルマット滞在に引き続き、今回はグリンデルワルト滞在の記録である。アキレス腱の手術からそろそろ3ヶ月で、リハビリも順調に進み会活動への復帰は近い。回顧録も今回で終わりにしたいと思う。フィナーレはユングフラウ(4158m)登頂の記録である。

### 第3回 フィナーレはユングフラウ登頂

8月4日(火) 晴

朝8:30にツェルマット駅を出発した。Brig、Spiez経由でInterlaken-Ostで登山電車に乗り換え、13:30にグリンデルワルトの駅へ到着した。グリンデルワルトはワイスホルンがそびえ立つ、きれいでおしゃれな町だ。まずInformationへ行き窓口のお姉さんに聞くと、ユングフラウヨッホ行きの電車はクライネシャイデックから出るとのこと。



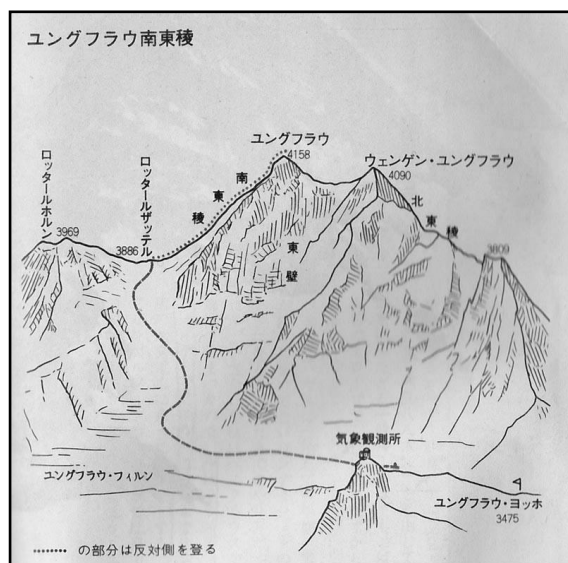
左からアイガー、メンヒ、ユングフラウ

クライネシャイデックには山小屋はあるがキャンプ場はないとのこと、お姉さんに山小屋の予約をとってもらおう。登山電車に乗り、車窓からアイガーの勇姿をながめながら15時にクライネシャイデック駅へ着く。予約した山小屋はGrinderwaltblickという、駅より10分くらい坂を上ったところにあった。私の拙いスケッチのように真正面にアイガー北壁がそびえ、メンヒ、ユングフラウと並ぶ百万ドルの眺めだ。この山小屋の従業員にロンドン帰りのスイス人のおねえさんがいて、流暢な英語で対応してくれ、フランス語から解放されて気持ちが楽になった。色っぽい目でウィンクまでされたのにはまいったけど。明日はいよいよ今回の最後の山、ユングフラウに登ると思うと闘士が湧いてくる。

夕暮れのベルナーオーバーラント三山を見ながら雄大な風景に浸る。小屋からはアルプスのホームソングが流れ、下の牧草地からは牛の鈴の音がカランコロンと聞こえてくる。

“本当にアルプスのど真ん中にいるんだなあ”と改めて実感するひとときであった。

小屋は満員のため、私はスイス人20人ぐらいのパーティのなかに寝場所を提供してもらった。明日は図に示すユングフラウヨッホから氷河を横切りロッターザッテルに至り、南東稜からユングフラウ山頂を目指す。明日に備えてぐっすり眠ることができた。



ユングフラウ登山ルート図

8月5日(火) 晴

早朝の3:30 発にクライネシャイデック発の登山電車に乗る。二両編成で150人くらい乗っている。この時間だといずれも登山者で、アイガー、メンヒ、ユングフラウと分かれて登ることになる。アイガーの登山者は途中のアイスメア駅で降りて行った。

ユングフラウとメンヒの登山者はユングフラウヨッホで降りて登る。4:30に駅を降りて長いトンネルを抜けスフィンクスのプラトーに出ると、空はもう明るくなり始めていた。スパッツとアイゼンを付け、ピッケルのカバーをはずして登り始める。ヨーロッパの雪、氷、岩のある山は、必ずパーティを組み、ザイルで結ぶのが常識になっている。また、どんな初心者でもアイゼン、ピッケル、登山靴のスタイルで、スパッツ、手袋、防寒具を必ず装備している。パーティの組み合わせを見ると、例えば親子3人で、夫婦で、恋人同士で、あるいは仲良しの仲間同士で、と行った身近な生活の中で楽しむ気風がある。私は単独なので白い目で見られた。ザイルがないので、アレッチ氷河のトラバースはピッケルを深く刺して慎重に突破した。

ロッターザッテルへの登りは急でスパッ！と切れ、かなり緊張する。下りのことを考えると少し心配になる。クーロワールをトラバースし、次の岩稜に取り付くのに嫌な個所があり、随分と順番待ちしている。落ちれば氷河まで500mはありそうだ。ピッケルとアイゼンを確実に効かせ、慎重にトラバースする。

ロッターザッテルでは冷たい風が北西に当たり始め、ウィンドウヤッケを着る。ここから南東稜で岩稜の混じった急登になり一気に頂上まで登る。

8:25 についに4158mの山頂に立つ。頂上は想像以上に狭く、10人いればもういっぱいだ。スイス人に写真を撮ってもらおう(写真)。今日の天気は快晴で、マッターホルンからモンブランまで一望である。



ユングフラウ山頂にて(バックにアイガー)

下りは危険で登り以上に緊張した。陽が上がり雪の状況がだんだん悪くなってきた。ロッターザッテルからのベルクシュレントの下りを降りきった時、ホッとするとともに、ユングフラウ頂上に立った満足感がジワジワと込み上げてきた。これで今回の山行は全て無事終わったのだ。事故もなく無事に日本に帰れると思うと、やった！と無性に嬉しさが込み上げてきた。

ユングフラウヨッホに着き、おもむろにアイゼンをしまい、ピッケルにカバーをかける。これでおまえらの役割も終わった、よく働いてくれた、と語りかけそっとさすりたくなった。宿泊した山小屋の女の子に、いらなくなった山の食料、装備等をあげたり、ゴミバコに収納して整理し、スッキリした気分になる。アルプス登山は期待以上の成果があった。モンブラン(4807m)とユングフラウ(4159m)の両方に登頂し、氷河を歩いてグランドジョラスの直下まで行くことができた。天候に恵まれ体調も維持できた、等の幸運もあった。

さあ、あとは下界の平和で楽しい時間だ、町へ降りよう。ところがクライネ・シャイデックからグリンデルワルトへ下る登山電車で、どこかの敬老会らしきおばあちゃん連中のまっただなかに座ってしまった。気がついてシマッタ、もう遅い。まるで高見山みたいな巨漢がビッシリ座って周りを取り囲まれている。うちのおばあちゃんなんて、実にスマートなものだと思った。あの総重量で、よくあの電車は耐えているなと思った。グリンデルワルト・グルンド駅いっせいに降りて行った時はほっとした。

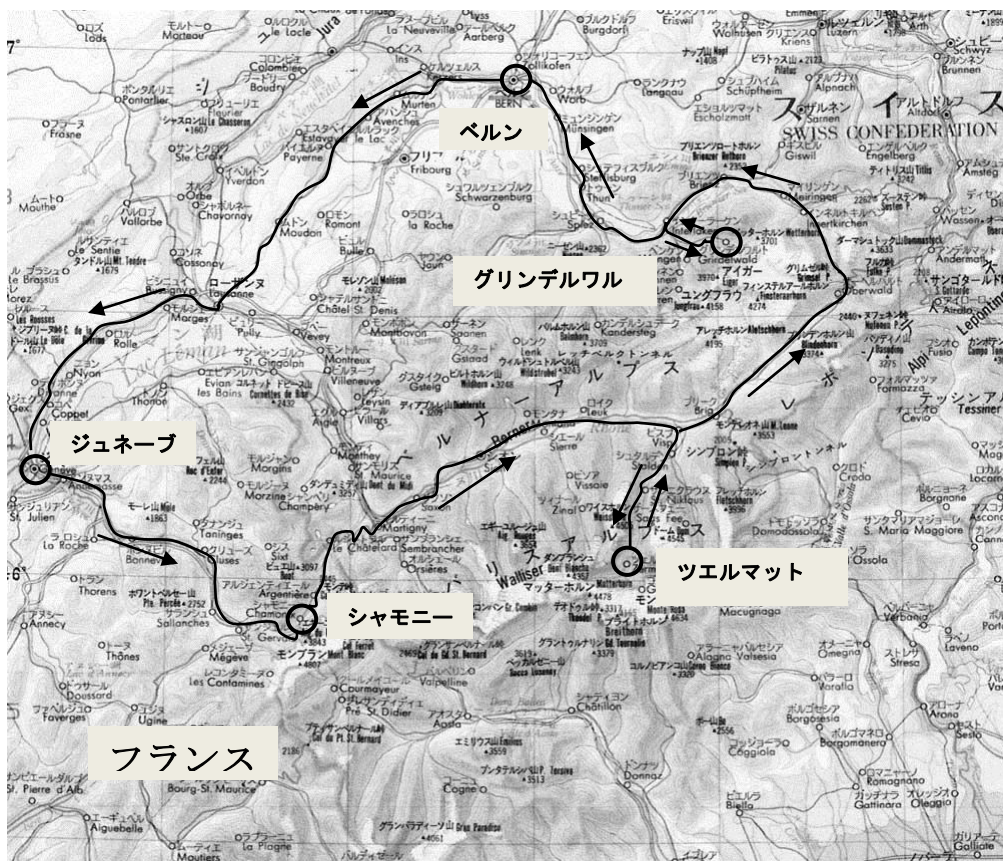
グリンデルワルトの町に着いた時は、登山がすべて終わった爽快感があった。ヨーロッパで始めてホテルへ泊まる（今までは全てテントか山小屋だった）。シャワー付きで快適！ひさびさに汚れた体を洗い垢を落した。一段落して町へ散歩にでかける。山行を終えたあとに下界の町に浸る気分は最高だ。夜は街のテラスでゆったりとワインを飲み星空をながめて、最高に充実した気持ちになった。グリンデルワルトはセンスのある町だ。山、町、ホテル、山小屋、すべてが好印象であった。すっきりと清潔な町並みで、避暑に来た観光客のファッションも良く、フィナーレを飾るにふさわしい町だった。

8月6日：帰路のベルンで途中下車（下ルート図）。ここはスイスの首都であり、国際列車の通る町である。駅は大きくハイセンスであり、広い地下街にはたいのものがそろっている。国際列車はゆったりとして広々としていた。車両の真ん中にドアがあり、前半分の青いシートがNO SMOKING、後ろの赤いシートがSMOKING。外の景色は麦畑、ぶどう畑、それにレマン湖がひろがっていた。ローザンヌのような大きな駅へ停車するときには、口笛のマーチの音楽が流れ、フランス語と英語のアナウンスがあった。

最後の宿泊地、ジュネーブは国際都市らしく活気のある町だ。レマン湖にかかるモンブラン橋を宍道湖大橋に例えれば、故郷の松江の町に似ているところが多々ある。湖には嫁ヶ島みたいな松の木の島があり、船が浮かんで白鳥が泳いでいる。そして大噴水が一定時間ごとに空高く吹き出る。夕方は、夕日を見ながら船の中のレストランでビフテキを食べ、ワインを飲んで華麗なひとときを過ごした。

8月7日：予約した市内観光のバスに乗る。コースは国連本部ヨーロッパ総本部、WHO、ユネスコなどの国際機関の建物、ジュネーブ大学、サンピエール寺院、オーヴィヴ公園などの見学。ジュネーブ大学は宗教改革で有名なカルビンの創設した古い大学で、広い構内にクラシックな作りの校舎がたち、森に囲まれていた。夕方、シャモニーで別れたツアーのメンバーとジュネーブ空港で合流し、無事帰国の途についた。

（おわり）



ヨーロッパアルプス訪問地ルート図